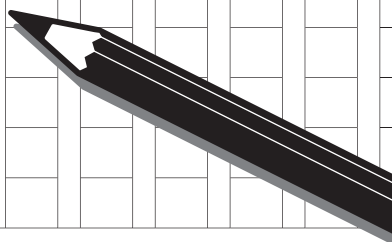


令和7年度

第11回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第十一回目を迎えた今回は、全国から一九三一点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「五時間目という戦場」

優秀賞 「月桃」
げつとう

佳作 「散髪代は三千円」

兵庫県 姫路市立琴陵中学校

二年 尾上 直孝 …… 4

青森県 青森市立西中学校

一年 平山 心陽 …… 8

兵庫県 姫路市立広畑中学校

一年 田内 颯太 …… 11

■高校生部門

最優秀賞 「本とともに」

優秀賞 「私の一步」

佳作 「画面に映らない幸せ」

兵庫県立姫路西高等学校

一年 平野 琴葉 …… 15

山梨県 駿台甲府高等学校

二年 河野 陽菜 …… 19

東京都 青稜高等学校

二年 塚田あすみ …… 23

■一般部門

最優秀賞 「いのちを生きる」

優秀賞 「つなぐ」

佳作 「父への詫び状」

山梨県 南アルプス市（無職）

日沼よしみ …… 26

東京都 練馬区（主婦）

井口 未来 …… 30

三重県 四日市市（主婦）

二村 直子 …… 34

■概要

……… 38

第十一回

藤原正彦エッセイコンクール

入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 二年

五時間目という戦場

尾上 直孝

昼休みが終わると心にひとつの覚悟が生まれる。「よし、今日こそは……最後までしっかりと集中する！」そう思いながら席に着く。教科書を開き、ペンを手に握る。教室はさっきまで楽しく明るかったのに、今では空気がガラツと変わり、窓から見える風景がやわらかくにじんで、目の前の景色が少しずつ遠くなったような気がした。

五時間目が始まって十分ぐらいになると、視界がまるやかに、先生の声が音楽のBGMのように耳に流れこんでくる。ちょうど良いテンポ、音量、内容によって頭の中が、段々と穏やかな海のようになっていく。気付けば、ペン先がノートの隅にぐるぐるとした謎の模様を描き始めている。周りを見ると、皆は真面目に授業を受けているように見える。でも、近くの友達の首が少しずつ角度を変え始めたのを見つけてしまった。そして、ガクン！と戻ってくる首。そう、やつもまた、五時間目に現れる悪魔と僕と同じように戦っていたのだ。午後の教室には、見えない何かが漂っている。日差しは優しく空気が暖かい。集中しようと思えば思うほど、意識が上の方にふわっと浮かんでしまう。こうなると、黒板

の文字はもう記号にしか見えない。ノートをとっている手がまるで他人の手のようだ。さつきから書いている文字は、もう自分でも読めない。もしも未来の考古学者がこのノートを発見したら、「これは古代の悪魔と戦った戦士の記録だ！」と思うかもしれない。

気付けば、ぼくの心はどこか別の場所を旅している。空を飛んでいたたり、家にいるような気分になっていたり、それが現実ではないと気付く頃には先生の話していた内容のほとんどは風に流されている。

けれど、時々現実に戻ってくる。「ここ重要ですよ。」「あつ、間違えた!」という先生の言葉が、現実へロープを引っぱるように響く。ハッとして体勢を立て直す。急いでノートに線を引く。でも、その線もまっすぐな直線ではなく、ゆらゆらとゆがんでいるようにしか見えない。まるで、僕の意識のゆがみが線となって写し出されたかのようなのだ。

どうすればこの戦場で生き残れるのだろうか。もちろん夜によく寝る、朝食、昼食をしっかり食べる、といった方法はある。でも、それでも、実際には負けているのだ。

そこで僕なりに対策を考えてみた。まず試してみたのは、体をつねるという作戦だ。これはわりと効果があった。つねっていると目が覚める。次は息を止める作戦だ。20秒なら大丈夫だが、あまり無理をすると別の世界に行ってしまうので少し危険だ。それならと、最近しているのは、実況をつけることだ。頭の中でナレーションを試してみる。「ただいま

彼のまぶたは必死に重力と戦っています。しかし、ペンはすでに止まっている！」こうしているとなんてなってきた、ごまかせる。でも、一番効果があつたのは、さっきまで机に顔を伏せて悪魔との戦いに秒で負けていたやつに、「おまえ、さっき一瞬いなかったぞ。」と言われることだ。これは、とても屈辱になり、心の中で「おまえだけには言われたいわい！」という怒りがこみ上げてくる。しかし、そのうちまた悪魔におそわれる。

なぜこの時間に限って、頭がふんわりとしてしまうのか。朝は大丈夫だった。昼休みまでは完ぺきだった。なのに、この午後の一時間だけ、魔法がかかっているみたいだ。結局、あらゆる対策を試してみても、今の所負け続けている。しかし、明日もまた、ぼくは五時間目に挑む。教室という名の戦場で、夢の旅に出かけないように。

正直ほめてほしいと思う。眠気と戦うことは、つまり、それだけ頑張ろうとしていることだからだ。誰にも見えない静かな努力を僕はしているのだ。明日は今日よりほんの少しだけ意識を遠くに飛ばさないようにしよう。そんな小さな決意を胸に、今日の終わりのチャイムを聞く。

これは大人になったらいつのまにか忘れてしまう時間かもしれないが、ノートの隅に書いた落書きが、今までとこれからの自分を全て覚えてくれるはずだ。ぐるぐるとした謎の

模様が果たしてこれからも毎日少しずつノートの隅に増えつづけるのかどうか、ぼくの戦いはこれからも続いていく。

中学生部門

優秀賞

月桃 げつとう

青森県 青森市立西中学校 一年

平山 心陽

月が、三日月なら、綺麗だと感じる。月が、皓月なら皓月千里。こうげつせんり息を呑む。こうげつ皓月という言葉は満月を表すには丁度いい言葉である。満月の周りは白く光っているからだ。その、白い光をじっと見つめて、目を閉じてても、ぼんやり月の丸が瞼の裏に浮かぶくらい白く、光り輝いているから、満月には皓月という言葉が丁度いいと私は思う。

向かいの家の屋根は、てらてらと光を照り返していて、私は目を輝かせました。夜、それが起こった場合は決まって、満月と決まっているからです。そういう満月は私の影さえもはつきり、地面に落ちる位、眩しい満月と分かっているためだからだ。それ位に月が明るければ不思議と気持ちも明るくなるもので、満月を見る為に屋上の、塀の上へ座った。夜にはおかしい明るい地面を見れば、満月と確信して、空を見れば、それ、ほら、綺麗な満月！幾度となく、綺麗な、今日のような満月を見て来た。中秋の名月にも劣らないように光り輝いている、満月であった。きらきら光るお星さまは満月の引き立て役に成り下がるほかは無い。それくらい皓月千里の満月であった。月の、右下にあるきつと、今飛び立つ

たばかりの飛行機の光。ビル群の窓の光。それらよりもずっと満月の方がてらてら、太陽の光を照り返していて、秋風^{あきかぜ}を吹かしていた。

三日月を子供と呼び、満月を大人と呼び、新月を老人と呼ぶのならば、月が満ちていくその姿は成長と呼べるだろう。その成長は、二ヶ月で一回転してしまうくらいに、くるくるころころ欠けて埋めてを、繰り返している。時間もそれくらいころころ回り続けているからか、もう九月。四月の桜はもう枯れて、虫に食べられている葉桜しか、残っていない。その横で松の木が毛虫を駆除するためだろうか、おおきな松ぼっくりを沢山付けた木が横たわっていて、今日の、晴れない空を見ていた。

晴れない空をいくら待っても雲は退いてもくれやしない。天の川を見ようと、中秋の名月を見ようと、その周りには何時^{いつ}も雲が横たわっていて、それが退くのを待っていればきつと朝になってしまう。だから運よく見れた日の月がより一層、綺麗に見えるものです。午前中の白い月。夕方の気が早い薄黄色の月。真夜中の皓月。新月のただ静かな夜中。車窓から見える中途半端な形の月。月は見る時間、場所によって何もかも変わるものだ。と毎度毎度本当に思う。それこそ、夏の月よりも冬の、空気がしんと冷え切った所にちよん、という月の方が私は好きだ。鼻に突き抜けてゆく冬のだけの冷たい空気。手足は真っ赤で、

顔は桃みたいに、赤いと思える気温。その空気の、夜の雰囲気。それで、月が上がってればもっと完璧、と思えるからだ。完璧すぎて時間も忘れてしまうから、足は感覚が消え、月が雪と私を照らして、あの、電柱の五センチくらい上にきらきら光っている月を見てしまう事も冬には、しばしば。

月は、私にとつて、とても大事で、感性を豊かにしてくれるもので、素敵なものだから、あつちのスーパールの電気が消えるのを待ってれば、月はもう沈んでしまう。月はそれくらい電気に弱くて、存在が薄れてしまうが、その景色は何時いつも見える、景色の様なよう気がして、安心感と言うべきか、そのようなものも与えてくれるものだ。月は、私にとつて身近な存在で、だから多分、太陽よりは近い存在にいる。だから、ふと、空を見上げて月がそこにいれば、どこことなく嬉しい気持ちになってしまうのは私だけだろうか。今日の月は、皓月千里だけれど、少しもしたら、皓月千里の満月は黒い、羊雲の布団の隙間から、ちらちら顔を出すばかりだった。辺りはもう、真っ暗で秋風が、私の隣に座っていた。秋風は、もう、冬の顔になっていた。

中学生部門

佳作

兵庫県 姫路市立広畑中学校 一年

散髪代は三千円

田内 颯太

三千円。それはぼくの行きつけの散髪屋の中学生料金だ。

その散髪屋に行き始めるようになったのは、もともとはぼくの髪の伸びの速さが原因だった。半月と少し程で、髪はかなりの毛量になる。伸び切ったぼくの髪を一言で表すなら、「爆弾」がピッタリなレベルだ。

そのため以前までは家から少し遠い店へ、母と車で通っていたのだが、

「半月のペースで送り迎えるのは大変やねん」

という母の一言で、現在の家から近く歩いて行ける散髪屋へと決まったのだった。

そんなわけで今の散髪屋へと行くことになったが、初めて店内へ入る時は緊張した。店の人はどんな人だろう…優しい人がいいな…漫画とか雑誌とか置いてあるかな…。最後は緊張というよりは期待になるけど。

「こ、こんにちは…」

恐る恐るドアを開ける。

「お、こんにちは。初めまして」

中には他のお客さんの髪を慎重に切りながら、笑顔であいさつを返してくれた男の人がいた。年齢的には「おっちゃん」という呼び名が正しいだろうか。前のお客さんは終わりがけだったようで、すぐにぼくの番が回ってきた。なお予約の時に、母にどんな風に切るかは伝えてもらっている。

「じゃあ、事前に伝えてもらった切り方で切っていくな」

おっちゃんはそう言いながら、流れるように下準備をしていた。ためらいなく準備をする姿に、ぼくは目をうばわれた。

簡単にシャンプー等を済ませ、いよいよ髪を切っていく。時にバリカンで大胆に、時にハサミでゆつくりと。その度、ぼくの爆弾と化した髪の毛はきれいに切られていった。さながらおっちゃんは爆弾処理のエキスパートである。

そんな風な出会いで始まった散髪屋とおっちゃんとの関係。あれから何年か経ったけど、今もあの散髪屋に通い続けている。それに、おっちゃんとも次第に打ちとけてきて、最初の頃は会話も少なかったが、今では学校の事を話したりして和やかな空間が生まれるようになった。感触がものすごくすぐったくて大笑いしながら行った顔そりも、今は堂々と、どや顔の一つでもキメながらも大丈夫。ぼくにとつて散髪屋へ行くことは、一つの

リフレッシュにもなっていた。

そんなある日、小学六年生の三月のことだ。いつものように散髪を終え、レジの番をしてくれるおばちゃんに料金をわたす。

「はい、いつもありがとうございます。…そういえば、来月から中学一年生やんな？」

「あ、はい」

「なら、来月から中学生料金になるから、三千円になるで、忘れんといてな」

三千円…。高い…。

帰ってこの事を母に伝えると、

「おばちゃんも抜かりないな」

と笑っていたが、その声には落胆の色が見えた。お米だけでなく、散髪の値段まで上がるとなると、さすがに苦しいのであろう。

その夜、我が家で会議が開かれた。議題は「散髪屋、これからどうしていくのか」である。ほぼ一カ月に一度、三千円を払うのはかなり厳しい、ならいつそ散髪屋を変えるのはどうか、というわけだ。丁度我が家の近くにはもう一軒散髪屋があり、値段もお手頃なので、こっちはどうかと発言するのは母だ。

しかし、ぼくはその考えをつっぱねる。もちろん、値段だけで見れば散髪屋を変える方がお得だ。でも、決してそうではないことが、何年も通い続けてぼくは分かった。

ぼくは髪を切られながら、おっちゃんとか話をするのが本当に楽しい。テストについてアドバイスをもたらったり、おっちゃんが時に自分の子供の頃を思い出して話したりする。そんな姿を見るのが楽しいし、うれしい。自分との会話でこんなにもワクワクしながら話してくれるおっちゃんの散髪屋を離れるのは個人的に申し訳ない気がする。

そう母に伝えると、母は

「じゃあ、今の散髪屋で行こか」

と快くしてくれた。

三千円になった今も、ぼくはこの散髪屋へ通い続けている。おっちゃんと会話しつつ、散髪をしてもらう。そこに三千円以上の素敵な時間が生まれると思う。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県立姫路西高等学校 一年

本とともに

平野 琴葉

文字だけの世界。そこに私はいない。つるりとした紙面に整然と並ぶ黒いインクは、私の脳内に、私でない誰かの視点を映し出す。現実と切り離されたその世界では、煩雑な日常の匂いはしない。本の中の世界。いつまでも浸っていたいのは、その静かな輝きが深く私を満たすから。

ついにやってしまった。いつかそうなると思っていた。本を読むのに夢中になって、降りる駅を乗り過ごしたのだ。学校帰りの電車、満員の車内は雑然としていて、ラスト数ページに集中する私の耳に車内アナウンスなど入るはずもなかった。車窓には、見たことのない景色と間拔けな私。それを横目で見ながら、今度からは集中しすぎないようにしようとして一応決意する。おそらく無駄だが。幼い頃からそうだ。ひとたび本に集中すれば、私の耳は何の音も拾わない。現実世界のすべては、私の視界の、思考の隅にすら映らない。私の目が映すのは、紙の上で私の知らない世界を描く、言葉たちだけ。

幼い頃、夢見る少女だった私は、ファンタジーものばかり読んでいた。森の動物たちと

の冒険。もちろん主人公は動物の言葉がわかる。きらきら光るペンダント。はめ込まれた宝石には何らかの力が宿っている。木苺ジャムのパイ。庭でとれた木苺を使って大きなかまどで焼く。そんな幻想的な世界に魅了され、図書館に足繁く通った。成長するにつれ、ファンタジーに加えて、ミステリー、伝記、ルポルタージュなど様々なジャンルを読み漁るようになった。表紙を開くたびに新しい扉が開き、ページをめくるたびに未知が流れ込んできた。どんなに遠い世界でも、本の中では鮮明だった。文字の並んだ平面のもとと奥、その先は、どこまでも輝いていた。日常から離れたまっさらな私を、抗えないほど惹きつける。私は目を逸らせない。知らない世界。私のいない世界。いつだって心を奪われていた。ふと顔を上げて、時計と目が合う。二時間も経ったらしい。心地よい読後感を目と脳の重さで感じながら、私の体に二時間ぶりの空気が入ってくる。私はこの瞬間が、最も嫌いだ。すでに私は青い髪の大魔法使いではなくて、世界を飛び回る医者でもなくて、悲しい理由で罪を犯したサラリーマンでもない、ただの普通の高校生だ。本を閉じたとき、取り巻く現実のすべてが一気に押し寄せてくる。机の上の解きかけの問題が目に入り、胸にじんわりと広がる罪悪感。私が「時間に追われる大人」になってしまった証拠だ。中学生、高校生と成長するにしたがつて、宿題が増えて、テストが増えて、役割が増えて、時間が減った。あんなに本が好きだったのに、本を閉じている時間が随分増えた。今まで家族の

ようだったのに、私は本から離れてしまった。本は私の「いちばん」だったのに、もうそうとは言えない。本と私を繋ぐ糸が、段々とほどけてしまっていた。

いや、本当にそうなのだろうか。中高生になり、読書の時間の大部分は私が現実世界で生きる時間になった。小学生の頃よりずっと単純でなくなってしまった日常には、たくさんの困難が待っていた。何度も変わる環境や、複雑になる人間関係、難しい勉強、部活動や生徒会での責任、どれもが私を苦しめた。もう嫌だと泣いたときも、しんどくて立ち上がれないときもあった。それでも立ち向かい乗り越えてこられたのは、本が助けてくれたからだ。本から得た知識は私に自信をくれた。本から学んだ情緒は私自身を豊かにした。本を読む時間が減っても、今までに出会った言葉たちは私を癒して、前へ進むための力をくれた。忙しくなったからこそ気がついたことだ。文字の中の世界は、単に遠い世界を見せてくれるだけではない。「現実世界で生きる」ことを支えてくれているのだ。本と私は今もずっと、いつだってずっと、繋がっていたのだ。

きっと、これからの私の人生も、本とともにある。数学の問題に苦しんで苦しんで、未来まで見えなくなってしまうとき、本は私に安らぎと確かな希望をくれるだろう。抑えきれないほどの嬉しさも、悲しさも、憤りも、喜びも、登場人物と泣いて、笑って、昇華させるのだ。困難に打ち勝ったあの少女が、悲しみを乗り越えたあの親子が、私を導いて

くれる。多くの言葉たちは少しずつ心に降り積もり、自然と私をつくっていく。本は私にとっての栄養で、そのすべてが私の宝物なのだ。

文字だけの世界。そこに私はいないから、素晴らしい。そこに私はいないけれど、それでも繋がっている。本の力を借りて、強く現実を生きていく。表紙のその先にある静かな輝きは、私の行く先を照らし続けてくれるだろう。これから、ずっと。

高校生部門

優秀賞

山梨県 駿台甲府高等学校 二年

私の一歩

河野 陽菜

私って大人になれるのかな。未熟な自分を変えたいと思い始めてから数か月、何の成長もしていない自分に、息が詰まりそうになる。いつからか感じていた微かだった焦燥は、日がたつごとに、加速して膨れ上がっていた。夜、一人悶々と考えて、込み上げてくる不安をごまかすように目を瞑って、いつの間にか眠気に負けている。眠るつもりもなく眠って、朝5時にソファの上で、蒸し暑さに目を覚ます。何かしなくちゃいけないことが残っていたような。不安や焦りが一気に襲い掛かって、無理やり脳を覚醒させる。そうだ、課題。昨日手を付けないまま眠ってしまったんだ。思い出して跳ね上がる心拍数。ぶわっと体温が急上昇するのを感じた。“もう間に合わない”その受け入れ難い確かな事実を、恐る恐る咀嚼する。息が浅くなる。また失敗したんだ。馬鹿、今度こそちゃんとしようって、思ってたのに。日の出を待つ薄明るい窓の外に嘲笑われる。ぼやけた視界を振り切って立ち上がると、覚束ない足取りで歩く。震えそうな手で雑な身支度を済ませ、机に向かって時間ギリギリまで悪足掻き。遅刻しそうな私を怒鳴る母の声に責め立てられ、空欄だらけ

の宿題を鞆にしまった。家を出なければいけない時間を過ぎて、ばたばた荷物をまとめる私を見つめる失望の眼差しを、見なかったことにして玄関を飛び出す。

学校へ向かうまでの道、太陽が強く照りつける夏。真っ青な空が鬱陶しく思えてしまう。こんなに明るいと自分のからっぽな中身を透かして見られそうで、落ち着かない心を宥めるために日傘を差した。情けない自分が誰にも気づかれていないだろうか。気になってすれ違う人の目線の先をこっそり窺ってしまう。無意識に体が強張っていて、まだ着いてもないのにに大分疲労を感じる。学校は好きじゃないし、何より終わらなかった課題を持って教室へ向かうのは憂鬱だ。「課題、ある？」係の人が回収にくる。「ごめん、無いです。」出来の悪い私が、私じゃない誰かに知られてしまった。当たり前には出来ていることなのに、出来なくてはいけないことなのに。ちらりと横を見ると、テストに向けて勉強しているクラスメイトが目に入った。手元のノートにはびっしり数式が書いてあって、教科書からカラフルな付箋が覗いている。顔を上げると、目線の先で談笑する数人の女子生徒。手入れされた綺麗な巻髪を揺らして楽しそうに笑っている。自分のなりたいたい姿のために努力ができる人たちは素敵だと思う。学校には、尊敬できる人がたくさんいる。そんな人たちが眩しくて、余計に自分が醜く思える。荒れた肌も、うねった前髪も、誰にも見てほしくない。人と話すのも苦手だ。自分のよくない部分に気付かれそうで、気が気じゃないか

ら。せめて、目くらいまともに見えるようにならなきゃな。「あ、次移動教室じゃん」すぐ隣から聞こえた声で我に返って、慌てて私も教科書を準備する。一番最後に教室を出て、みんなの背中を追いかける。みんな、はいいよ。過ぎていく時間に、私だけが取り残されているような気がした。

帰りのバスに揺られているときでさえ、劣等感に苛まれて穏やかにはなれなかった。どうしてなんにもできないんだろう。私には得意なこともない。長所を尋ねられても何も答えられない。それどころか、当たり前のことでもこなせないし、自分を変えるための努力もまともにできない。何度反省しても、一人でぐるぐる考えても、どうせ私はこの先も変わらない。――どうせ。

“あれ？” 墮落に抗うことを諦め始めた自分に気が付いて、ハツとした。私は自分を変えたくて出来ない理由を探していたはずだったのに、これでは本末転倒だ。つい先程頭に浮かんだ「どうしてできないのか」という疑問が形ばかりのものであり、答えを出そうだなんて端から思っていなかったことに気づいた。私はきつと、これ以上自分に失望することとが怖かったのだと思った。意味のない自己否定は反省なんかじゃない。出来ると信じても失敗する自分が嫌になって、自分に期待しなくなることで逃げようとしたのかもしれない。このままでは駄目だ。私自身が諦めてどうする。向き合うことに躊躇していた自分に

喝を入れる。頭の中でこんがらがっていたものが少しずつ解けていくのを感じた。

なんだか久しぶりに一步踏み出せた気がする。他の誰かから見たら、こんなちっぽけな一步は価値にならないかもしれないけど、焦らなくていい。自分を信じて、自分のペースで歩いていけるのなら、それでいい。そうすれば、きっと大人にだってなれるから。

車窓から入り込んでくる西日が眩しい。それを避けるように俯いていた顔を思い切った窓に向ける。透かして見られたってもう怖くない。歩き出すその先を見据えて、深く息を吸い込んだ。

高校生部門

佳作

東京都 青稜高等学校 二年

画面に映らない幸せ

塚田 あすみ

朝の八時、いつも限界まで詰め込まれた満員電車で私はイヤフォンをし、スマートフォンを握りしめる。後ろの人のカバンが背中にあたり、人の波に押されながら無言でSNSを開く。誰かのつぶやき、友達の楽しそうな写真、キラキラした投稿たち。「なんで私は」と眩しい世界と現実の自分とのギャップに、胸の奥からじわじわと虚しさが込み上げてくる。心の中で「もう見るのはやめよう」と何度も思うのに、指は止まらない。スクロール、スクロール、またスクロール。SNSは世界を広げてくれると同時に比較の対象を増やし、「もっと痩せなきゃ」「もっと勉強しないと」「自分は平凡なんだ」と自分を追い込む存在にもなる。息苦しさを覚えるその感覚こそが「SNS疲れ」というもののなのだろう。

そんな私がSNSから距離を置くきっかけになったのは、ニュージーランドへの三ヶ月の留学だった。初めてインターネットの世界とほとんど触れない生活を送り、朝はホストファミリィに「おはよう」と挨拶をし、学校では直接顔を合わせて友達と会話をした。放課後はビーチを散歩したり、公園で風に吹かれたりする。寝る前にはスマートフォンではなく紙の本を開き、眠気が訪れるまで文字を追った。画面に映る情報の洪水から解放され

ただ目の前にある人や風景に心を寄せる時間は、なんだか小学生の頃に帰ったようでとても懐かしく、温かかった。

SNSのない生活を経験して気づいたのは「つながり」とは画面を通して得られるものだけではないということだ。むしろ目の前の人との会話や、自然の中で深呼吸する時間の方が心を満たし、自分らしさを取り戻してくれる。SNSで得られる承認は一瞬で消えるが人との対話や体験はじんわりと心に残り、人生を支えてくれる。もちろんSNSを完全に否定するつもりはない。新しい情報を得たり、遠くの人とつながったりできるのは大きな魅力だ。ただ、私たちはつい画面の向こうの「他人の物差し」で自分を測ってしまう。その結果自分の本当の気持ちや幸せを見失ってしまうのではないか。

ニュージーランドでの体験から学んだのは「比較」よりも「実感」を大切にする生き方だ。海辺の風の匂い、友達と交わした笑い声、ホストファミリーと食卓を囲んだ時間。正直このニュージーランドでの感覚を、これからも忘れずにいられるかどうかは自信はない。しかしSNSには残らないけれど確かに私の心を豊かにした瞬間。そうした小さな実感こそが、私にとつての本当の財産なのだと思う。

日本に戻り、再びスマートフォンを握りしめる日常が始まった。けれどもあのときの感覚を知った今、私は少し違う。スクロールする指を止め、本を開いてみる。イヤフォンを

外し、周囲の会話に耳を傾けてみる。何かが変わった自分を実感しながら今日も一日を精一杯生きていく。

一般部門

最優秀賞

山梨県 南アルプス市

いのちを生きる

日沼 よしみ（無職）

無言館。三十年ほど前に、信州は上田市に建てられた戦没画学生の絵を展示する慰霊美術館だ。開館当初から知ってはいたが、史上最悪と言われるあのインパール作戦に従軍し生還した父からその凄惨さを聞いて育った私は、よほど自分の気持ちが勝っている時でないと戦争による目の前の死を覚悟した彼らの絵の前に立つことは無理だと思い続けてきた。

今年、悲しいほど目に映る桜が美しく見えない。ふと、無言館が心に浮かんではなげだろう。今の気持ちの沈み方くらいのほうがもしかしたら彼らの心情に寄り添い、共感できるかもしれない。浅はかにも、そんな気持ちだったような気がする。

四月初旬、柔らかな春の日差しが、まだ芽吹きの浅い木々の間を縫って幾重にも交差するその先、小高いところに鎮まるようにひっそりと無言館はあった。

そつとドアを押す。一瞬、ほの暗さにたじろぐ。けれど、目はすぐに慣れた。

大きなものでは百号を優に超える人物画、風景画が八十数点。ゆっくりと歩く。ほとんどの絵に、それを描いたときのエピソードが簡潔に書かれて添えられている。直近に迫っ

た徴兵への恐怖を語るものは一枚とてなく、淡々と、ひたすらに。それがかえって痛ましさを増幅させて、故郷の風景や、母、妹などに向けられたそれぞれの思いの極致が胸に迫った。画学生たちの息遣いが聞こえてきそうな絵の前を歩む。立ち止まる。歩く。一步、二歩。

分けても私の胸を突いたのは、恋人や新妻を描いた何点かの裸婦像だった。「帰ってきたら続きを描くから」と言いながら、入営の直前までその絵筆を離さなかったという絵の前に、私は立ちすくむ。どんなにか生きたかったであろう。どんなにか生きて帰ってほしいと願ったであろう。瞬時を惜しみ対峙した二人の、底知れぬ無念さや絶望にかられた絞り出されるような物言わぬ声に射すくまれて私は動けない。

と、そのとき、突然、弾けるように、突き上げるように、ある思いが私の胸の中に湧きあがってきた。

そうか、夫は生きたいのだ。

戦没画学生の描いた絵の前に立ち、夫のことをこのように切実に思うとは想像もしていないことだった。

夫がパーキンソン病を発症して二十年が経つ。心身の自由を徐々に奪う進行性の難病で歩行が出来なくなつて久しい。人口肛門や胃ろうの造設は子供たちと相談しての結論だった。認知症も進んだ夫は、そんな重大なことの意味表示も、もはや出来ないのだから。

それでも、家族の声や家のなかの音や匂いが夫に届いてこそその「夫らしさ」だと信じ、訪問医療に助けられながら自宅介護にこだわってきた私に、主治医からその限界を告げられたのは一年前のこと。容赦のない決断だったはずなのに、心ここにはない虚ろな日々が続く。

入所した介護施設に日参し、残されている記憶の断片を引き出そうと、語り掛け、問いかける。思い出の写真を見せる。好きだった歌を口ずさんでみる。夫は、そのほとんどに目を閉じたまま無言だ。

あなたは今、どこをさまよい、何を思っているのか。なぜ自宅ではなく、ここにいいのか。私はなにかをまちがっていないか。

夫の顔を覗き込み、揺り動かしたい衝動に私が揺れる。限りなく寂しく、限りなく大切なひと時。夫は生きているのか、生きていないのか。いつもその狭間にいるようで、やるせなさを抱えては、ふわふわと、落ち着きどころを見つけれない自分を持て余す。

そんな一切のもやもやが、この瞬間に吹き飛んだ。生きたくても生きられなかった、あまりに理不尽に断ち切られたたくさんの命の無言の叫び声が「いのちを生きよ」と、私を揺さぶり続けた。

あたたかな夫の手は、握れば握り返す。呼び掛けに、小さな声で答える。私の名前を呼

ぶ。呼ぶ、呼ぶ、私の名前を呼ぶ。

夫は生きている。生かされている。生きたいと思っている。その確信が、私の胸に熱くこみあげ、涙があふれ出てきた。

私は傲慢だった自分を心から恥じた。画学生の気持ちに寄り添うどころか、彼らの描いた絵にこのように励まされようとは予想だにしていなかった。

よろけそうな足取りを確かめつつ、私は外に出た。

見上げれば、来た時には気づかなかった山桜が伸びやかに枝を広げ、春のさきがけを歌うように、小さな淡い花がうす水色の高い空一面を覆ってかすかな風に揺れていた。

こんなに美しい桜の花を、私は、初めて見たと思った。

一般部門

優秀賞

東京都 練馬区

つなぐ

井口 未来（主婦）

堂々たる体躯に、白い歯がまばゆい笑顔の写真。「若い頃の俺もイケてるだろう。なあ、そうだろう」お義父さんは、ニヤニヤしながら言った。お酒が大好きで、大声で話し、笑いながら自身の禿頭をギャグにするような、豪快な人だ。

今日もまた、クリームパンを探しながら、家中をよたよたと歩く。その足取りは、まるで赤子のような。「ここに、あつたんだがな。なあ」気が付くと、クリームパンを頬張っている。いやいや、今はそれどころではない。お義父さん、トイレと間違つて、お風呂の排水口でやってしまいましたね。ボロアパートの二階に住んでおり、一階は、老舗のカフェ。それこそ、お義父さんと同じくらいのお歳の方々が集う場だ。そこが、排水口からあふれ出た汚水で、雨漏りしているとのこと。家の中も、玄関までべっとり汚水だらけだ。もう、ここにも住めないだろう。お義父さん、クリームパンを食べている場合ではないのです。ズボンの裾を汚水まみれにしてベッドに腰かけ、頬にクリームを引っ付けて、満足そうに頬張る。「そろそろ限界かもしれないな。他の人の手を借りてみよう」家族で話し

合い、お義父さんの老人ホーム入りが決まった。タクシーに揺られ、窓に引つ付いた桜の花びらを眺めるお義父さんに乗せて、老人ホームへと向かう。あのときお義父さんは、クリームパンを握りしめて、ずっと口をへの字に結んでいた。

病院から、お義父さんが危篤との知らせが届いた。梅雨空の下、夫と息子の三人でタクシーを走らせた。「やつぱり、会うの怖い。見たくない。おれは死にたくない」病院に着くと、息子が面会を渋った。「じゃあ、先にパパが会ってくるね」夫が病室に入り、家族で来たこと、孫が恥ずかしがって入れないことを伝えた。お義父さんはまぶたを閉じたまま、「ああ」と、しわがれた声を出した。

「このつくね、あつくねー。」

お義父さんは、私と目が合うと、ニヤニヤしながら、しょうもないギャグを連発する。

「あー、くだらない、しょうもない」と言っつては、二人でゲラゲラ笑い合っていた。そんな、お義父さんとのやりとりが大好きだ。実の父よりも一緒にいて居心地が良い。何とも愉快で、気心の知れた仲とは、正にこのことを言うのだろう。「次はママが会ってくるからね」息子に声を掛けて病室へ入る。目は落ち窪んで、体はやせ細り、おむつを穿かされたお義父さんが、力なく横たわっていた。夫が「俺の奥さん、お嫁さんだよ、わかる？」と聞く

と、時間をかけてまぶたをゆっくり開き、私を見た。目が合ったと思った瞬間、わずかに唇が動いた。

「知らん。」

声にはならなかったが、そう言った。窓には、大量の雨粒が流れていた。廊下にいる息子の元へ行き、「おじいちゃん、ママのことがわからないみたい。そういう病気だから仕方ないね」と声を掛けると、「そうなんだ」と小声で答えた。そのまま、息子はしばらく廊下でうずくまっていた。何十分そのままでいただろうか。看護師が、何度か義父の様子を看に来了。息子はペットボトルの水を飲み、「せっかく来たんだから、ちゃんと会っておきたい」と言い、病室へ入ろうと、少しずつ動き出した。廊下を一步進んでは、一步下がり、時間をかけて、病室へ入っていく。病室の扉越しに、中を覗こうとして頭を出しては、引っ込める。少しずつ進めた歩みも、カーテン越しにおじいちゃんの息遣いを感じるところまで来た。いよいよカーテンを開き、おじいちゃんとの面会を果たす。「あ！来たよ！」夫が言うと、お義父さんはしばらく閉じていたまぶたを開いて、目玉をゆっくり右下へと動かし、孫を見つけ、じっと見た。息子は、緊張で顔が強張っていた。

「こ、こんにちは。」

再度、閉じかけたまぶたを見開いて、目玉を固定し、瞳に孫の姿を焼き付けているよう

だった。息子は戸惑いながらも、その時間を共有するかのようになり、静かにその視線を受け止めていた。

まぶたが閉じかけたその時、お義父さんはもう動かないと言われた腕を伸ばし、孫に手のひらを向けた。息子が、反射的に手を差し出したその瞬間、二人は握手をした。「俺が最初に会いに来たとき、握手なんてしなかったのに」夫が驚いて言った。それは、ほんの一瞬の出来事だった。体の電池が切れたかのように、力なく腕を下ろし、手のひらを左手の上に重ねて、再びまぶたを閉じた。外はいよいよ本降りになり、雨音が強くなっていた。

一般部門

佳作

三重県 四日市市

父への詫び状

二村 直子（主婦）

人の骨を見たのは人生で初めてだった。骨になった父の姿が頭から離れず、勢いよく蛇口をひねった。シンクに置いたままの朝食の食器が冷たい水を跳ね返す。さっきまでの黒い儀式を洗い流すように食器を洗った。ふと、大事なことを忘れていたような気がして、数時間前からの自分の動きを頭で再生させ、一瞬息が止まりそうになる。

「ん？持ち帰ったはずだけど、今どこに？」

慌てて洗面所へ走り、洗濯機を一時停止して蓋を開けると、ふかふかと輪ゴムが浮いていた。頭が真っ白になり、洗濯機に手を入れて、「きゃー、どうしよう！」と叫んだ。父の遺骨を洗濯機で回してしまったのだ。

一昨年の春、父が他界した。肺を患い、亡くなるまでの数ヶ月は寝たきりに近い状態だったが、自分の家で大好きな庭を眺めながら最期まで過ごせたことは、父にとつては何より幸せだったと思っている。葬儀は家族だけで慎ましく執り行われた。子や孫たちに囲まれて、穏やかな葬儀だった。骨になった父を見て、死とはこういうことか、と怖いような気

持ちにもなったが、人間も自然界の一部だということに、妙に納得もした。

「遺骨が欲しい方、いらっしゃいますか？」

と女性職員さんに訊かれ、私と妹は小さく手を挙げた。どこがいいかと尋ねられたので、二人同時に「指」と答えた。働き者だった父、優しく頭を撫でてくれた父、その手が、私たち姉妹には印象的だったからだろう。人差し指の先あたり、二センチほどの白い塊を彼女は慣れた手つきでつまみ上げ、それを半紙で包んで輪ゴムで緩く留めて、私たちに手渡してくれた。私は遺骨を白いハンカチに包み、黒いバッグの一番上にそっとしまった。

私の両親は、瀬戸内海に浮かぶ島の生まれだ。結婚して、父の仕事の都合で遠く離れた街で暮らすことになった。両親は島をいつも恋しがっていた。墓はこちらに造ったのだが、せめて父の一部を島へ帰してあげたい、と私たち姉妹は考えていた。そのために遺骨を少し、持ち帰ったのだった。

自宅に着くと、ひどく頭痛がした。自分たちにまもっている線香の香りが気になり、すぐに青いパーカーとジーンズに着替えた。家族皆の着ていた喪服に消臭剤を吹きかけ、夫や息子の白いシャツや彼らの靴下など、葬儀に持って行ったものはすべて洗濯することにした。ポンポンと衣類を洗濯機に投げ入れ、意識が朦朧とするなか、情性で私は洗濯機をスタートさせた。

洗面所で叫ぶ私の声にびつくりして、二階にいた十九歳の息子が駆け下りてきた。彼に事情を話すと、呆れた顔で、まずは洗濯物を全部風呂場へ移すよう、冷静に言われた。洗剤水を含んだビシャビシャの衣類を、私はすぐ隣の風呂場へ運び出す。床も悲惨なほどに水浸しになったが、気にしてはいられない。父を救い出す気持ちで、絡まった洗濯物をひとつひとつ丁寧に剥がしながら、骨を探した。

「どうしよう、碎けたらわからなくなるよね。じいちゃん、成仏できないわ。」

と嘆く私を、息子は励まし続け、

「母さん、これやん、白いのがある！」

と、父の骨を見つけてくれた。少し欠けた破片も二つ見つかった。それらを洗面所で洗ってティッシュで拭き取り、キッチンペーパーの上で乾かした。遺骨をこんなふう雑に扱っていいのかどうか心配になり、自分の失敗に気が滅入った。落ち込む私に、息子が言った。

「じいちゃんは瀬戸内海の島に早く帰ってたかったんやろ。細胞なら排水溝を通って下水から海へ出て、瀬戸内海まで行けるやん！だからさ、あまり気にしやんでもいいって。」

そんな慰めに、私は思わず吹き出し、気持ちが少し救われた。きれいな緑色の空箱に父の骨をそっと入れて、リビングの棚に置いた。その上に父の遺品のメガネを乗せ、笑っている父の写真も添えたら、私専用の仏壇ができた。その日から毎日、懺悔の気持ちも込めて私は

緑の箱に手を合わせ続けた。

翌年の秋、初盆も終えたので、妹と瀬戸内海へ父を連れて行くことにした。両親の故郷の島に来るのは久しぶりだった。私と妹は、迷うことなく島の小さな港を目指した。以前は船着き場として賑わっていたが、しまなみ海道が開通し、今では栈橋も閉鎖され、港には誰もいなかった。そこから少し離れた海岸から、父の遺骨を散骨することにした。

細かく砕いた遺骨を手で摘まみ、深緑色の海へそっと撒くと、太陽に照らされた小さな粒がキラキラと光って、ゆっくり、ゆっくりと底へ沈み、海と一緒にになった。その厳かな光景に、私は涙が溢れた。そしてようやく、あの失敗を許されたようにも思った。

今でも毎朝、私専用の父の仏壇に手を合わせる。写真の父が「粗相をしないように気をつけろよ。」と、私に今日も笑いかけている。

令和7年度 第11回 藤原正彦エッセイコンクール 概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和18年旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『本屋を守れ』『美しい日本の言霊』など著書多数。
平成26年4月、姫路文学館長に就任。近著に『藤原正彦の代表的日本人』。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和7年9月18日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに最優秀賞×優秀賞×佳作各1編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 1,931点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	547点	331	189	520	27	0
高校生部門	761点	380	309	689	72	0
一般部門	623点	41	74	115	507	1
合計	1,931点	752	572	1,324	606	1

中学生部門：市外では、兵庫県宝塚市、加古川市、明石市、赤穂市から、県外では、東京都、青森県、愛知県、熊本県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめた応募）は9校であった。

個人応募者は5人であった。

高校生部門：県外では、東京都、千葉県、山梨県、愛知県、京都府、広島県、徳島県、福岡県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめた応募）は10校であった。

個人応募者は10人であった。

一般部門：北海道から沖縄県まで、全国から応募があった。

ドイツ在住の日本人からの応募もあった。

■ 表彰式

日時：令和8年1月18日（日）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）

第11回 藤原正彦エッセイコンクール
入賞作品集

編集・発行 姫路文学館
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地
TEL (079) 293-8228

令和8年(2026年)1月18日発行